



プラネティストが行く 29

開発されて滅ぶ森林 利用されずに滅ぶ森林

中村 繁夫

写真・桃井和馬

わが社では年に1回、社員の家族全員を連れて、海外研修旅行に行く。今年は子どもたちの要望を取り入れて、ジャングル探検とオランウータンを見るためにボルネオ島に行くことになった。ところが、ボルネオのコタキナバル周辺はジャングル探検どころか宅地造成やリゾート開発で環境破壊が進んでいることが分かり、がっかりしてしまった。

ボルネオは世界で3番目に大きな島で、昔は豊かなジャングルに囲まれたパラダイス・フォレストと呼ばれていた。この豊かな森林資源が乱開発され、輸出された結果、今や65%の原生林が失われたとされる。毎年、森林伐採で200万畝が失われておりその80%は違法伐採といわれている。その最大の輸出先が日本市場である。

森林業が生活の糧である森林労働者は森林企業に雇われるが、政府が丸太の輸出を禁止したことから、森林マフィアによる組織的な違法伐採が進んでいるという。森林マフィアは巧妙で、インドネシアで違法伐採した森林資源を1週間当たり約1000台のトラックでマレーシア側に密輸していると、現場の業者は言っている。

さすがに、日本の木材商社は国家間の協定を遵守してボルネオからの木材輸入を自主規制するようになったが、最近では住宅ブームに沸く中国向けの輸出が激増しているらしい。持続可能なルールを作るためには、インドネシア一国だけの規制では、その密輸を政府としても取り締まることができないのが実態だ。伐採後の植林を制度化しても違法伐採を野放しにする限り、森林破壊はますます進んでいくのである。

一方、日本は国土面積の約7割が森林であり、森林立国と言われたが、ボルネオの森林が開発されて減じるのに対して、利用されなくて減びつつある。最近では、外国資本が日本の森林を買い漁っていることに気がついた行政や森林組合が、新たな対応に迫られている。外国の投資家は、資産価値、排出権取引の可能性、水源の確保などに新たな価値を見出し、日本の森林を投資目的で買収している。資源確保についてもそうだが、危機が起きてから慌てて行動を起すというのは、今や日本のお家芸と言ってもよいだろう。

何も手を打ってこなかった林野庁の責任は重いが、日本の林家が行政指導のもとに胡坐をかいてきたことも事実だ。木造建築といってもかつてのように、木目を生かした意匠性の高い化粧材が使われることが少なくなり、和室自体も造られることが少なくなっているなかで、現在の人々のニーズに合わせた材の使い方を提案するということも必要だろう。つまり、「どのような材（資源）が求められているのか」を、資源を持っている側が考えるという発想だ。

現在の林家は、労働力不足から、枝打ちや間引きすらできていない。そうするうちに、貴重な森林が今や「緑の砂漠」と化しており、ビジネス以前に国土保全すら難しくなっている。せつかく、先代や先々が植林した杉や檜の伐採時期が来たのに核家族化で跡継ぎ不在のまま、立ち枯れ状態になっているのは皮肉な話だ。

ボルネオでは、森林開発の規制を強化すれば失業者が溢れて雇用が守れないという。いまやボルネオ島の森林減少と森林破壊によって生活圏を脅かされる労働人口は数千万人ともいわれている。段階的な伐採禁止も重要だが、森林マフィアに利用されている林業従事者を日本の森林で雇用できるような、一石二鳥の仕組み作りが真の国際貢献ではないのかと思うがどうだろうか。

〔なかもむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン社長。近著に「放浪ニートが、340億社長になった!」（ダイヤモンド社）

〔ももい・かずま〕1962年生まれ。フォトジャーナリスト。新刊写真集「すべての生命にであえてよかった」10月25日発売予定。



ボルネオのラテライト土壌は、一度日光に当たると、再生に長い時間がかかる（当頁）。違法伐採された巨木。今では盤根を持つこれほどの巨木は極端に少ない（前頁）。